

医者も知らない平穏死



連載⑭
〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に「『平穏死』」10の条件」など。

末期がんや老衰で死ぬ時、どうなるか知っていますか？

残された時間が週単位から日数単位になると、ウトウト寝ている時間が長くなります。呼びかけると目を開けます。つじつまが合わないことを言ったり、興奮して手足を動かしたりすることは「せん妄」といいます。臨終の時が近づくと、呼びかけへの反応が鈍くなります。次第に顎を上

下させる「下顎呼吸」をするようになります。なれば、やがて呼吸が止まります。ここで理解してほしいの



(写真はイメージ)

「出し惜しみ、せず…」

は、テレビや映画でよくあるような「最期の言葉」を述べた後、ガクッと息を引き取る」ということはあり得ないということです。つまり、やりたいこと、伝えたいことがあるなら、少しでも体力があるうちに、実行すべきなのです。

Gさん(62)は、末期の肺がん。ご本人は自分の余命がそう長くないことを承知されてました。「お父ちゃんと新婚旅行に行つたあの場所に、もう一度行きたいねん」ご主人の前では恥ずかしくて言えなかったように、私と2人の時、ゴッソとおっしゃいました。「今やったら大丈夫や。やりたいことは出し惜しみせえへんと、ダンナさんと言つた方がいいですよ」

私が帰つた後、ご主人に打ち明けたのでしよう。翌週には2人で、思い出の地、九州へ泊3日の旅行に出かけました。

Gさんが旅立されたのは、それから3週間後。実はご主人は、在宅での看取りに反対でした。Gさんが在宅医療を強く希望したので、渋々応じていましたが、「抗がん剤でも民間療法でも、何でもいいから最期まで病と闘ってほしい」という考えだったのです。

しかし、お葬儀の後、「妻のやりたいことをさせてあげられて、ホンマによかった。頑張り続けられたら、難しかったかもしれない」と……。ご主人、涙を流されつつも、スッキリした顔をされていました。